小熊正久（おぐままさひさ）

学位の種類　博士（文学）

学位記番号　文第280号

学位授与年月日　平成25年3月7日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文題目　**フッサール現象学における表象媒体の研究**
—知覚・想像・画像表象に関して—

論文審査委員　（主査）
教授　野家啓一　教授　座小田　豊
教授　戸島貴代志
准教授　直江清隆

論文内容の要旨

序章

フッサールは、『論理学研究』[1]において、意識作用の「対象に向かう」という特性を、ブレンターノから受け継いだ「志向的」という用語を使って「志向的作用」と呼んだが、その作用を形成する主要契機として、「感性的契機」と「意味的契機」とを区別した。「感性的契機」は対象の「感性的現れ」を成すものであり、「意味的契機」はその現れをしかじかの「意味」での対象と見たり、思念したりするという契機である。

この理解に従えば、「感性的な契機」は志向性において対象の表象を可能にする一種の「媒体」と見ることができる。もちろんこれは、それぞれ独立に存在する「対象」そのものと「意識」とを媒介するという意味での「媒体」ではなく、「対象への関係」を創設するという意味での「媒体」である。だが、こうした「感性的契機」の内実についてのフッサールの見方は、分析と思索の深化とともに変遷を遂げた。本論文ではその変遷を通して、諸表象をその「媒体」という観点から考察する。その際、中心テーマになるのは、「知覚作用」、「想像作用」、「画像表象」[2]といった諸作用に関するフッサールの分析である。これは二つの重要性をもつ。

1　本論文で引用ないし言及されるフッサールの著作は、本論文末尾の文献表に提示した。

2　本論文で「画像表象」とは、肖像画、写真などによる表象のことである。フッサールの用語ではこれらは「像意識」と表現されることが多いが、本論文のなかの「像表象」や「精神的像表象」との混同を避けるために、「画像表象」の語を使う。

第一は、諸作用そのもののもつ重要性である。これらの作用は、対象が意識に与えられる仕方であるので、意識と対象ないし世界との関連を考察する上で不可欠の意義を有する。「知覚作用」は、現実とみられる世界や対象が意識される際の基本的なあり方であり、他方、「想像作用」や「画像表象」は、非現実の（可能であることも不可能であることもあるが、いずれにせよ現に存立していない）対象や世界が意識される際のあり方であって、これらは「中立変様」という契機を含む。それは、さまざまな可能性にかかわる「判断」や「本質看取」、仮説的な意識、またメルヘンの読解などにも通じる「虚構的意識」として重要性をもつ。とくに「画像表象」は現代社会における「表象媒体」として重要な意味をもつと考えられるが、彼の分析はその基礎研究として重要な意義をもつと思われる。

第二は、フッサール現象学の展開における重要性である。フッサールは1900/1901年に公刊された『論理学研究』において論理学の基礎づけのために意識や表象の研究を行ったが、その後1905年頃から「現象学的還元」という「超越論的現象学」の方法を構想しつつ、「意識」と「志向性」に関する研究を深めていった。ちょうどその時期に「知覚作用」や「想像作用」などに関する研究も活発におこなわれた。そこでこれらは「超越論的現象学」が成立する際に行われた具体的事象の分析であるという重要性ももつのである。

以上の二つの重要性のゆえに、本論文は、『論理学研究』から『イデーン第一巻』（1913年）に至る時期に属する、「知覚作用」の媒体としての「感覚」ないし「射映」、「想像作用」の媒体としての「ファンタスマ」、そして、「画像表象」の媒体である「画像」ないし「像客体」についての分析を考察の主題とする。

『イデーン第一巻』においてフッサールは「志向性」を、すべての体験を自らの内に担う「普遍的な媒体にも等しい」ものと特徴づけている[3]。この表現に従えば、ここで扱う「感性的契機」や「画像」は「志向性」という「媒体」の具体的事例と考えることができるであろう。

最初に、『論理学研究』第２巻第６研究（§27）で総括されている「志向作用」の構造をみておこう。「志向作用」は、「対象の表象」であるか、「対象の表象」を基礎とするものであるかのいずれかであるとされている。後者は、「表象された」対象やその存在について「信じること」、「信念を中止すること」、「欲すること」、「疑うこと」、「判断を下すこと」などに分かれるが、これらは、「作用性質」についての区別とされている。他方、「対象の表象」の方は、「感性的内容」、「意味的統握」、「統握の形式」という３つの契機からなる。「感性的内容」の「意味的統握」によって対象への関係が構成されることになるが、その際の「統握の形式」は、「知覚的」、「想像的」、「記号的」形式という３種類に区別されている。例えば、或る感覚として与えられる「感性的内容」がリンゴという「意味」によって「統握」され、リンゴという対象の「知覚」が成立する。また、単なるインクの文様とも捉えられうる「感性的内容」が文字通りの「リンゴ」あるいは「林檎」といった「記号」として統握され、それを介してリンゴと意味づけられた対象を思念することもある。そして「想像」の場合、与えられる「感性的内容」すなわち「ファンタスマ」がやはり「意味的に統握」されて、リンゴという対象の「想像」が成立することになる。

ところで、ブレンターノは「心的現象」つまり「心的作用」における「意識の対象への関係」を「対象の志向的内在 intentionale Inexistenz」と特徴づけたが、フッサールは、この規定の曖昧さを払拭するために、批判的注意を行っている。表象媒体の現象学的分析にとって重要な意義を有するのでそれを見ておきたい。

その曖昧さの一つは、志向性を、物と物の間の物理的関係のような実在的（リアルな）関係と捉える

3 Ideen I, S171.

誤解を生じさせかねないということである。例えば机と本といった物は「意識された」対象であると言ってよいが、「意識」そのもの（あるいは「自我」）がそれらと同じように「対象」であり、意識と対象の間に実在的関係が成り立つわけではない。

もう一つは、志向性を、意識内部の二つの事柄の関係のように誤解させる可能性があるということである。例えば、意識内に「絵や写真のようなもの」があり、それを「志向的体験」ないし「自我」が「見る」といった関係が成り立っているとする誤解である。もちろんこうした考えは、「志向性」をも「画像意識」をも正しく扱っておらず、またそれについて何の説明もしていないのである。

では、こうした誤解を取り除いて考えてみた時、「意識の対象への関係」ということはどのように理解されるであろうか。フッサールは次のように言う。

> 「…二つの事象が［志向的］体験のうちに現在しているのではない。対象が体験され、更にそれと並んでその対象に向かう志向的体験が体験されているというのではない。また、部分と全体というように二つの事象があるのではない。…たった一つ志向的体験だけが現在しているのである…」[4]。

この箇所をみると、「意識が対象に向かう」あるいは「対象を志向する」という言葉でフッサールが言いたいことは、対象がしかじかの仕方で現れ、また、何らか意味づけられているということ、また、その際に意識のさまざまな様態があるということにほかならないことがわかる。言い換えれば、先に見たように、対象の「現出」とその「意味的統握」、「現出様態」が存するということなのである。

なお、こうした立場からみると、たとえば「私が神ジュピターを表象するということは、私が何らかの表象体験を有しており、私の意識の中で神ジュピターの表象作用が行われているということである」。そこで、通常の意味での対象の「存在」と「非存在」にかかわりなく、「志向作用の対象」や「志向性」という言い方や考察ができることになる。

第１章　フッサールにおける「射映」の概念

上でみたようにフッサールは、『論理学研究』おいて「志向作用」の分析を行ったが、その数年後、「対象が意識から超越していること」こそ最大の「謎」だと述べるに至る。そして、いかにして超越的な対象が意識されるのか、また、いかにして意識にとって対象の超越が存立しているのかを見ることこそ根本問題であり、その解明のために、対象の措定をやめて反省を行う「現象学的還元」という操作が必要であると考える。

こうして、超越的な「物」の知覚的な現れ方が考察の主題となる。つまり、想像における物の現れ方（「再現前」と呼ばれる）と違って、知覚においては、まさしく物が「現前（現在）」しており、しかも、幻覚ないし錯覚であることがわかった現れとは異なり、知覚においては対象は現実的なものとして「措定」されているといった事柄が明白になる。　さらに、物を知覚するような「超越的知覚」と知覚そのものが反省的に知覚される場合とでは対象の与えられ方が違うということが注意されている。後者においては、反省され対象となる知覚作用などが「実的に」すなわち「十全的に」捉えられているのであるが、前者においては、対象としての物は「不十全な」ままにとどまる。そして、前者のように与えられるものは「内在的なもの」と、それに対して後者のように与えられるものは「超越的なもの」と呼ばれる。

さてフッサールによれば、反省によって、意識に内在すると認められるのは、「感性的与件」と「意味的統握」であるが、その感性的与件は、超越的知覚においては、超越的なものの「射映

4　L.U.II/1, S372.

Abschattung」としてはたらくのである。では、知覚における「媒体」としての「射映」はどのようにはたらき、超越的なものを呈示するにいたるのであろうか。この解明こそ、「超越の謎」の解明ということになろう。

「射映」とは物の側面であると言われることもあるが、それは、あくまでも私にとって現れてくる側面のことであり、そうした「射映」は、単なる感覚ではなく、陰影を伴うとともに、空間的かつ時間的な広がりをもつ感覚的な現れである。射映の「空間的広がり」は「知覚野」において与えられるが、その「知覚野」とはキネステーゼなどに対応し、それと相関的に成立するものである。他方、射映の「時間的広がり」を構成するのは「内的時間意識」である。音の感覚といった「源的な所与」が「過去把持」されることにより「現在的なもの」として対象が与えられるが、その「現在」は時間的な幅をもっている。そして、そうして意識された（例えばメロディーのような）時間的対象は再び「想起」といった形で「再現前化」されうるようになる。こうして、知覚野において広がりつつ、しかも時間意識における広がりをももつ多様な所与が総合されて、「一つの物」の「多様な現れ」という形で「物」の「統握」がなされるのである。『内的時間意識の現象学』、『物と空間』や知覚に関する講義にみられるこうした分析は、まさしく「物の超越」の解明であり、「知覚的現出」の現象学的分析の最重要な成果であったと言えよう。

第２章　想像作用の分析と「端的な想像」の概念

フッサールは当初、「想像作用」を、「精神に内在的な像」を表象し、それを介して「現に存在しないもの」を思い浮かべるという「複合的な作用」として理解していたが、1904/05年の講義『想像と像意識』の途上で、想像における現れ方の「非現前性」、「無性」に注目するようになった結果、そうした現れを通しての「端的な想像 schlichte Phantasie」を主要な想像作用として認めるようになった。われわれは端的に、非現前的なものとして対象を表象するのであり、その際の現れ方は、「変幻自在性」、「浮動性」によって特徴づけられる。「イメージ」という語の示唆するところもあり、われわれは「想像」の名の下にいわゆる「画像」のような現出を考えがちであるが、上の分析はそうした謬見を一掃する重要な分析である。悪魔や天使を思い浮かべること、不在の友人を思い浮かべることは、それらの像を、あるいは、像を介してそれらを思い浮かべるのではなくて、不在という有り様においてであるが、直接、悪魔、天使、友人を思い浮かべることなのである。

第３章　感覚とファンタスマについて

これに相応して、想像における「感性的与件」と「統握」も考察し直され、両者ともに擬似的な（gleichsam）現れ、つまり「あたかも存在するかのような」ないし「然々であるかのような」現れ、すなわち、この意味で「非現前的な」現れとして理解されるようになる。例えば、赤のファンタスマは「赤があるかのような」現れであり、赤いセーターの想像は「赤いセーターがあるかのように」思い浮かべることであり、市庁舎の想像は「市庁舎が眼前にあるかのように」思い浮かべることなのであり、決して、知覚的現前があるのではないし、知覚野の中に想像物が現れるわけではない。こうしたファンタスマの在り方の叙述は、*Husserliana.XXIII* の「テキスト Nr.12」などにおいて見られるが、それは、「内的時間意識」の分析結果、「感性的所与と統握」という図式の再検討、「想像における反省ないし現象学的還元」の実態の明瞭化などと関連している。最後の点に関して言えば、想像や想起について反省しそこに何が含まれているかを分析する場合、それらを反省する以上、想像や想起を行いながら、その中で反省せざるをえず、そうだとすれば、われわれは、「あたかも存在するかのように」という有様でそれら

の作用の内実を捉えるほかないのである。

こうして、第２、第３章において、「想像作用」が含む「非存在」の契機が剔抉されたが、これは、サルトルやコリン・マッギンによって主張された事柄であり、一般に、想像作用の再検討、また、人間の非存在（ないし虚構物 Fikutum）への関わりを考察する際に不可欠の視点であると思われる。そしてそれは、フッサールにおいては、「中立変様」という形でさらに検討されている。

第４章　中立変様について

さて、想像物とファンタスマのこのような「非現前的」なあり方は、のちに、「中立変様」として、想像だけでない広い範囲において、また最終的にはすべての措定作用（たとえば判断や願望など）の対応物として捉えられることになる、「あたかも存在しているかのような」という意識の在り方である。だがこれは、すでに『論理学研究』（第２巻第５研究）において「性質的変様」という名称のもとに認められていた意識のあり方であり、この「性質的変様」と想像や想起といった「表象的客体化」の作用の区別もすでになされていた。「表象的客体化」が他の作用に関わる場合には、他の作用が当の作用の客体となるのに対して、「性質的変様」は、他の作用を客体とするのではなくて、或る作用に含まれている「対象の存在の措定」を中止することなのである（本論文42頁の図を参照）。ここから、「性質的変様」を繰り返して行う（反復）の不可能性（無意味さ）と「表象的客体化」を繰り返し行う（反復）の可能性との対比が説明される。

だがこのような対比が成立する一方で、「表象的客体化」の一種である「想像作用」と「中立変様」には密接な関連がある。『論理学研究』においては、この関連は明確に把握されていたとは言い難いが、その後の分析において、「想像」と「想起」の区別などとも相俟って、それが明瞭になってきた。すなわち、「想起」が以前の知覚作用などの「存在の措定」を含むのに対して、「想像」はそうした「存在の措定」にとらわれることなく自由に「知覚」を思い浮かべる作用であるという区別がなされた。また、作用間の時間意識上の関連も含めて、「再生産」といった諸作用全体の関連が明確化され、これに対する「中立変様」の独自性も浮かび上がってきた。これらのことが、「想像」と「中立変様」の関連の捉え直しを促したように思われる。

結局『イデーン第一巻』において、フッサールは、想像作用は「中立変様」を含む「表象的客体化」（つまり「再現前化の中立変様」）と定式化するに至るのである。そうしてみると、「再現前化の中立変様（想像）」のほかに、知覚や願望、意志といった作用にもその直接的な「中立変様」が存在するということが明白になる（本論文48頁の表を参照）。想像作用と中立変様を同一視してはならないと彼が注意する所以である。なお、この区別の理解のために、本論文では、サライバの見解の検討により、ありうる誤解を斥けた。

第５章　画像表象について

画像を通しての表象を、フッサールは、先にみた講義『想像と像意識』(1904/05) の中で扱っている。その際、「像意識」（画像表象）の解明のために、彼は、３種類の「像」を区別している。第一は、像とはいっても絵画の画布や写真の台紙のような「物」であり、そのような「物」として知覚される（「物としての像」と言われる）。第二は、例えば子供の写真であれば、現実の子供とは異なるがそれに似た現れである（「像客体」と言われる）。第三は、上の例では、写真に写された現実の子供である（「像主題」と言われる）。さて、問題はこれらの像の関連の仕方であり、これらが関連することにおいてこそ「像」が成立するのである。すなわち、「或るものが別のものの像となる」という「像現象」の基盤が問われ

るのである。この問に対し、当該講義の前半では、これらの関連は「基づけられた」作用ないし「複合的作用」において成立するとされているが、その「複合」の根拠は明瞭でない。講義の後半にいたり、例えばスケッチの場合であれば、台紙、枠外の紙、鉛筆書きの線そのものといった「物としての像」の知覚と、そこに線描（スケッチ）として現れる「像客体」を見て取ることとの「葛藤」が「像意識」の根拠と考えられ、その際、「像客体」は「非現実性」ないし「無性」という特徴を備えていることが強調されている[5]。

つぎに、『イデーン第一巻』における画像表象の扱いを考察する。そこでは、「知覚の中立変様」が「中立的な像客体の意識である」とされている。つまり、次のように、知覚されるものが「中立変様」をうけ、措定に関して中立的状態になっているのである。

> 「別のものを写像しているこの像客体は、存在するものとしてわれわれの眼前に彷彿としているのでもなければ、存在しないものとして彷彿としているのでもなく、さらにまた何らかのそのほかの定立様相において彷彿としているのでもない。あるいはむしろ、その像客体は存在するものとして意識されながらも、しかし、いわば存在するかのようなものとして、存在の中立変様において、意識されているのである」[6]。

こうした「画像表象」ないし「像意識」の定式化をみると、先の講義における規定よりも、「中立変様」という事柄を通して、画像表象の有様がより正確に捉えられているように思われる。つまり、「像客体」は、たしかに現実として捉えられてはいないが、また、単なる非現実や無として現れているわけでもないのである。それにともない、この時期には「像」と無として露わになった「幻覚」や「錯覚」などとの区別が明瞭にされている。

では、この時期には、像客体の現出はどのように理解されているのであろうか。「像客体」の現出は中立的に変様されており、「信念」ないし「現実性」を欠いているのであるが、その状態は知覚との葛藤によるのではないとされている。

> 「そこには主張する現実性と保持される現実性の間の葛藤はない。あるいは、幻覚の場合のように二つの現実性の主張の間の葛藤ではない。なぜなら、像客体の現出は決して『通常の』［知覚における］物現出ではないからである」（Hua.XXIII, Text Nr.17）。

このように、ここに葛藤はないのであり、「像客体」自体が「通常」の知覚的な現出ではないとされている。では、どういう点で「通常でなく」「奇妙である」のかといえば、例えば、「像客体」としての写真に写っている子供の姿はあまりにも小さく平面的であり、石膏の胸像は、上半身については人間と似ているが下半身を欠き、色が真っ白であり、演劇の舞台は家のように見えはするが、奥行きを欠き、作り物であることは明白だから、と考えられる。こうして、「像客体」の現出は「像主題」に似たところもあるが、像主題（例えば人間）の典型とは明らかに異なることが明白なのであり、まさしくこの故に、「像客体」は中立的な有様で、「あたかも然々であるかのように」、現れているのだと考えられる。このことをフッサールは次のように表現している。

> 「像的虚構物は固有なタイプの無性である。それは、廃棄された措定という性格を伴う現出ではなくて、それ自身において廃棄された現出である。すなわち、それ自身において廃棄され、相互に廃棄しあう措定の諸要素を含む現出なのである」。

つまり、「像客体」は現実と直接に葛藤するのではなくて、その諸要素の奇妙さや不調和のゆえに、それ自身において廃棄されるのである。たしかに現実の典型と似ていないという点で現実への参照はある

5　本章のここまでの事柄は、論文では第3章で論述したが、この「論文内容要旨」では、「画像表象」というテーマに関する事柄として、ここで一括して述べた。

6　Ideen I, §111, S226.

けれども、直接に現実と対照されるわけではないので、「像客体」自身において廃棄が起こるとされているのである。

こうしたことに相応して、このテキストでは、注目すべきことに、「像客体」と「像物体」[「物体としての像」のこと] の関係は「葛藤」ではなく、「像物体」が「像客体」の現出を支えるような関係と考えられている。すなわち「像物体」は位置、素材、形態などの点で「像」の現出に適した物でなければならないのであり、この意味で、「像物体」は「像基体」とも呼ばれている。この「像基体」を「媒体（メディア)」と捉えるならば、この見方は、媒体の形成や身体への関連を含み、画像的媒体の理解にとって重要な視点を提供するものと考えられる。

以上のように、フッサールの現象学的分析が含む事象面での成果としては、「射映」を核とする知覚の分析、「端的な想像」の概念の確立と「ファンタスマ」のあり方の明確化、「中立変様」の概念の確立と想像及び画像表象との関連の把握、さらに、「画像表象」の成立の分析があげられる。

以上の成果を、「表象媒体」の在り方の分析ととらえるならば、各媒体の生成の根源とともにその生成の全体的な関連が現象学的な立場から明らかにされたと言えるであろう。とくに「時間意識」、「再生産」、「中立変様」といった全体に関わる契機を考えれば、このことは明らかであろう。

またこのことは、フッサールの現象学が、「現象学的還元」という操作によって、意識の志向性の有り様を系統的に解明したことと重なっている。

なお、「記号的ないし言語的媒体」の成立、現象学的還元と中立変様の関連の把握などの課題が残るが、本論文の論述がそのための基盤として役立つことを期待しつつ、以上を明らかにしたことをもって、研究の区切りとしたい。

以上

論文審査結果の要旨

フッサール現象学の中心概念である意識の志向性は、感性的契機と意味的契機の二つの側面から成り立っている。本論文は意識の志向作用を特に感性的契機に即して仔細に解明し、その働きを対象への関係を創設する「媒体（Medium)」という観点から捉え直すことにより、対象が意識から超越して存在するという「超越の謎（フッサール)」に迫ろうとしたものである。

論者はフッサールの初期（『論理学研究』）から中期（『イデーンⅠ』）にかけての思索の深化を追いながら、眼前の事物を把握する知覚作用においては「射映 (Abschattung)」が、非現実の対象を思い浮かべる想像作用においては「ファンタスマ」が、肖像画や写真などの画像表象においては「像客体」が、それぞれ媒体としての役割を果たしていることを明らかにする。表象媒体に関するフッサールの考察は、現象学的還元を方法とする「超越論的現象学」の成立時期と並行して展開されており、その点で本研究は超越論的現象学の企図を明らかにする事例分析としての意義をもつ。

まず「射映」とは事物が私にとって現れてくる側面のことであるが、この現象は知覚的現出が空間的に広がった「一つの物」の「多様な現れ」であることを呈示することによって、「事物の超越」のあり方を具現しているのである。これは時間的広がりをもった存在にも拡張される。たとえばメロディーの知覚に常に伴う「過去把持」のことを、フッサールは「射映」と表現する。この射映は、そもそも過去

を可能にするという意味で超越の「媒体」にほかならないのである。

さらに論者は、想像作用と画像表象においては「中立変様」が不可欠の契機をなし、それが表象媒体の成立基盤となっていることを指摘し、併せて先行するサライバの見解を批判的に吟味することにより、ありうる誤解を正している。

以上の考察は、表象媒体がわれわれの世界経験を拡張する機能をもつことを明らかにすることにより、媒体概念が現代のメディア論の基盤ともなりうることを示唆しており、フッサール現象学の可能性を押し広げたものと評価できる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。